■新春特別インタビュー

創業125周年　ハンドメイド注文紳士服

「柴田音吉洋服店」

激動の時代を越えてもなお変わらない、ものづくりのこころ

4代目 柴田音吉社長

『神戸のハイカラ文化の源流を見た』

まずは、左の古い写真をご覧いただきたい。これは昭和はじめ頃の、現在の舞子ビラ神戸。今も残る姫松のある庭園で、紳士・淑女が集まってパーティを開いている。中央に座る、黒いスーツ姿の日本人が、2代目柴田音吉である。現在の社長の祖父に当たる。先々代は、恐らく神戸では初めてヨットを所有した日本人で、ロンドンから取り寄せたヨットを瀬戸内海で乗っていたという。そう思って写真を見ると、右上に写る海辺には、たくさんの帆船が並んでいるのが見えるではないか！ 写真の外国人たちは、それらに乗ってやって来たのだ。自慢のヨットに乗ってフランス・シェルブールの港町に集まり、ロブスターをメインにワインで乾杯するという、ヨーロッパのヨットマンたちの華麗でおしゃれなパーティが、昭和初期に神戸・舞子でも開かれたのではないかと推測されるーと、4代目柴田音吉社長（現）が教えてくれた。「かつてはこうして港に船が入り、ここから外国文化が発展した。まさにそれが、ハイカラ文化といわれる神戸文化なのです。神戸には、そんなハイカラ文化が育つ土壌があったんです。」

『初代から引き継がれてきたもの』

明治期に、外国人居留地に紳士服店を開いた英国人・カペル氏に弟子入りした初代・柴田音吉は、日本人初のテーラーとして独立。明治天皇のお洋服や、当時は

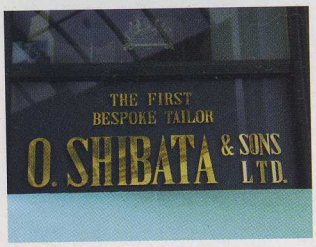
兵庫県知事であった伊藤博文公のフロッグコートを手がけたことも。初代が明治16年に元町で開業して以来125年、多くの財界人、文化人らの紳士服をあつらえてきた。「柴田で服を作ると、成功する」というジンクスさえ生まれている。大戦、震災、バブル崩壊など、さまざまな危機を乗り越えて、「よきお客さまと、よき技術者にも恵まれたこと」が、125年続いてきた理由だと、柴田社長は言う。

現在も、洋服をあつらえる際には、柴田社長がじっくりお客さまと話をしながらオーダーを受ける「ビスポーク（Bespoken）」スタイルをとる。注文を受けてからすべて自社工場で制作するのも変わらない。工場では、現代の名工にも選ばれている稲沢治徳工場長が指揮をとっている。

神戸で誕生し、今や全国的に有名となっているファッションブランドも多い。その先駆者である、柴田音吉洋服店のものづくりに対する姿勢を拝見しながら、そんな神戸のDNAの源流を見た気がした。

昭和初期、舞子の浜。右上に帆船が停泊しているのが見える。

稲沢治徳工場長は現代の名工、神戸マイスターにも選ばれる



㊎柴田音吉洋服店
☎078-341-1161（来店は予約制）
12:00～18:00　水・日曜・祝日休
神戸市中央区元町通4-2-22（南側2F）
http://www.otokichi-kobe.co.jp